

遠藤周作『白い人』論

—— 教義を超えた信仰の世界 ——

The Think on the *White Man* of ENDO Shusaku

—— Religious beliefs beyond doctrine ——

霍 斐*

HUO Fei

(要旨)

『白い人』はカトリック教徒として育てられた「私」が「悪」と化し、神学生であるジャックと戦った過去の自分を回想する手記である。先行研究には、「私」の幼年時代に関する記録を単にサディズムと総括したり、神を拒否しつつ同時に求める「私」の態度を「矛盾」と捉えるものもある。

これらに対して、本論では、手記で語られた過去の事件に即し、具体的に父と母が「私」に与えた影響を分析した。そして、一見したところ神を拒否するかに見える「私」の行動も、実はすべて神への求愛であり、神の顕現を要求する行為であることを明らかにした。更に、ジャックが自殺する行為の意味を追求することによって、真の信仰とは教義を受動的に守ることではなく、何が神の愛であり、善であるのかを、能動的な姿勢で問い続けることこそが求められているという解釈に到達した。ジャックの死を経験し、神の愛を自覚した語り手「私」は、この後「拷問者」として生き続けることを決心する。それは、真の信仰の表れとしての能動的な生の姿勢である、というのが本論の解釈である。

はじめに

周知のように、キリスト教は遠藤文学の最大のテーマである。遠藤周作にとって、子供の時に母に着せられたキリスト教という「洋服」を自分の「体に合う和服」¹に仕立て直すことは、文学のきっかけであり、生涯の仕事でもあった。従って、彼の前期作品は主に「西欧と日本との距離という点からスポットライト」²を当てている。中でも、『白い人』と『黄色い人』は、ペアとして、「白い人」の宗教観と「黄色い人」の宗教観を描いた作品である。特に『白い人』は、遠藤文学の本題に入る前になくしてはならない踏み台のよう

な作品だと言える。それは、日本人におけるキリスト教の問題を描くためには、まず、キリスト教の源である西欧を描く必要があったからである。だが、この作品は「白い人」の宗教観を明らかにするという遠藤自身の当時の創作意図を遙かに越え、その後の彼の文学創作の行方も暗示している。『白い人』は遠藤周作文学を研究する際に、見過すことのできない作品なのである。

『白い人』は『近代文学』（一九五五年五、六月号）に発表され、同年、第三十三回芥川賞を受賞し、半世紀以上に渡って読み継がれている作品である。今に至ってもなお、数多くの論者によって論じられているが、その主

* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程2年 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

な論点を以下に示す。

まず挙げられるのは、「私」とジャックの関係に焦点を当てた論説である。武田友寿は『『白い人』の主題はジャックの象徴している『白い世界』の論理と『私』の体現している『悪魔の世界』の論理との、ロジカルな対決にある』³と述べる。それに対して、玉置邦雄は「作者のジャック造型の意図」は、「私」との「対決的姿勢を志向するばかりでなく、『私』を救済しう人物がジャックであったとも考えられる」⁴と主張する。どちらもそれぞれ妥当性を持つ見解であると思うが、「私」とジャックの関係は対立でありながら、同時にまた対立ではない状態とはどういうことか。この問題を解くカギを示したのは、笠井秋生の論説である。彼は、武田が言う「対決」は「〈ジャック〉と〈私〉との間にみられるのではなく、〈私〉の心の中に存在するものなのである」⁵と指摘した。確かにそのとおりであって、ジャックとの対立関係とは「私」の心の中に生じた現象であり、問題にすぎないといえる。だがそれでは、「私」の主観を離れてジャックとの対立を見ればどうかが問題になってこよう。また、それを通して、「対立」ではない場面をどう理解するかという問題にもアプローチできるのではないか。

また、『白い人』は「善」「悪」を描いた小説だと分析する論説がある。秋山公男は「人間存在の〈悪の証明〉がこの小説のモチーフ」⁶だと述べる。下野孝文はそれを肯定し、『『悪』は、劇の中心に据えられる。しかし、それは常に善との『血なまぐさい戦い』としてある』⁷と「善」の存在を強調する。首藤基澄は『『白い人』のドラマは、キリスト教を機軸とした善と悪の葛藤であるが、遠藤周作はそれを二人の人物（ジャックと私）に張り付けにしている』⁸と論じる。つまり、ジャッ

クと「私」がそれぞれ善と悪を代表すると考えるのである。確かに、二人の登場人物を通して「善」「悪」の問題が色濃く描かれていることはいうまでもない。また、菅原とよ子は「ジャックの中には、たとえば信仰を人に押しつけるようなエゴイスティックな負なる部分が存在しているし、『私』の中にも、たとえば拷問を受けるジャックに〈耐え〉てほしいと念じるような、正と呼び得るものが存在していた」⁹と述べ、二人ともそれぞれが「善」「悪」の面を両方持っている指摘する。傾聴に値する見方であろうが、ここでも「善」「悪」の概念自体は常識の範囲にとどまり、それ自体が再検討されているわけではない。従って、本論は善悪の概念とその対立構図をより根底的なところから捉え直したいと考えている。

ほかには、大平剛は手記という形式に着目し、「主人公の語りをそのままの形で受け取ることはできない」と指摘した上で、「語り方を中心に」¹⁰作品を検討しようとする。確かに、手記とは、自分の過去を語るものであり、仮に語り手である「私」が偽りなく語ったつもりであっても、そこで語られたことは現在の語り手の認識に従属させざるをえない。従って、現在の語り手がどんな認識をもって過去を語っているかに注目する必要がある。

本論は、以上のような問題意識の下に、三つの部分に分けて作品を論じる。そして、「終わりに」では、この小説に現われるべきもの、それにもかかわらず十分現われていなかったものが、遠藤のその後の作品展開の中でいかに現れて来ることになるかについても触れてみたい。

第一章 過去の出来事による「私」の人格形成

1 父の影響

「私」は生まれた時からの斜視である。以下は、「私」にこれを知らせる父の「残酷な宣言」である。

自分の快樂しか顧みぬこの男は、やせこけた斜視の息子に愛情を持っていなかった。私が決して忘れることのできない仕うちがある。ある日、彼は指を私の目の前に動かしながら言った。

「右をみると言うのに、右だよ」それから彼はワザと大きな溜息をした。「一生、娘たちにもてないよ。お前は」

自分の顔だちのみにくさをハッキリ思いしらされたのは、この時からだった。私はそれを残酷に宣言した父を憎んだ。(三十八頁)

以上は手記に書かれている「私」に影響を与えた最初の事件である。父がどんな心境で上の言葉を話したかについては、我々に分かるすべはない。しかし、「私」にとって、この「宣言」は、いささかも変更の余地がないラベルのように、決定的に自分に貼りつけられた言葉であっただろう。この「宣言」が「私」にもたらした影響の深さと広さについては、すでに多くの論者が触れている。

例えば、山田都与は『『白い肉』を持つ父の手は、主人公に自分の醜さへの憎悪を植え付けた存在である』¹¹と述べる。大平剛は「奇形とは実は単なる肉体の謂いではない。他者の視線の問題であり、他者との関係性の問題であり、そのような悪意ある（あるいは関心、愛情のない）視線が言語化され、内面化された精神の状態をこそ言うのである」¹²と指

摘する。筆者は大平の意見に賛成する。なぜなら、問題は単に「私」の肉体の欠陥のレベルにとどまらず、父の「宣言」が「私」の対人関係に及ぼした影響こそが重要であると思うからである。それ故に、このことがその後「私」に具体的にどのように影響したのかを明らかにしたい。

父に「宣言」された「私」は、その後「鏡をみることもくるしく、路で少女たちにすれ違う時やあたらしい女中に始めて引き合わされる時、辛かった」。それは、斜視であることが「私」に自分のみにくさを意識させ、劣等感を感じさせたからだろう。言い換えれば、父は「私」の劣等感コンプレックスを喚起したとも言える。では、この劣等感コンプレックスは、どのように「私」に現れ、露呈するのだろうか。

まず、「私」は人を観察する時、特にその人の目を気にする。たとえば、最初に父のことを紹介する時「涙腺が発達しているのか眼だけは、いつも、泪でぬれていた」と描いている。アラビヤの娘と少年を語る時には、「黒い眼は細く、ながくなり、残忍な光に燃えた」と「被虐の悦びに光り震えていた」と形容している。また、ジャックの「瞳は腐魚の眼のように濡れだしていた」、中尉の眼は「浜辺にうちあげられた腐魚の眼のように、濁りぬれていた」、アレクサンドル・ルーヴィツヒは「頬のこけ落ちた長い汗まみれの眼だけが熱っぽく光っている」、アンドレ・キャバンヌの「血管でにごった眼」、どれもきれいな目とは言えないであろう。なぜ他人の眼をこのようにみにくくするのか。おそらく「私」は自分の斜視が気になるから、他人を見る時もおもわずその目に関心を集中し、無意識のうちにその醜さを誇張して自分の劣等感をやわらげようとするのではないだろうか。

また、劣等感コンプレックスを行動上に露呈した場合もある。

大学入学前の夏、「私」は法科大学に出かけていった。教室の外側で「私」は「みにくいからよ！」というモニックのジャックに対する痛烈な言葉を聞いた時、突然父の「宣言」を思い出した。娘たちが教室から出た後、「私」は彼女の下着を引き裂く。モニックの言葉は「私」のことを指したものではないのに、「みにくい」という言葉を聞いたとたん、父の言葉を思いだして、まるで自分が侮辱されたように感じたのである。それは、「自己の『みにくさ』へのコンプレックスが攻撃衝動へと転化した事例」¹³であろう。

また、「劣等感コンプレックスは、優越感も必ずその中に混入させている」¹⁴。それは上級生と新入生との親睦パーティでの「私」の心理活動にも見られる。次の一節を読んでみよう。

どの娘たちも、斜視の私を誘ってくれなかった。それならば、この騒ぎのなかから、早く引きあげれば良いのに、私はこの自分のみじめさ、暗さを味わい、たのしんでいた。私は慣れている。学生ホールの窓から、秋の陽が内庭のオーギュスト・コント像を金色に照らしているのがみえた。哲学教室のドームから鳩が曲線を描いて飛びたつた。

だれかが肩に手をおいた。私はふりむいた。キラキラと光る眼鏡の奥で、眼をシバたたかせながら、神学生がたっていた。

「君」と彼はかすれた、くるしげな声で囁いた。「君、こないか」

「なんのためだ」と私は答えた。

「むこうに、静かなところがあるんだ。君、こないか」

「なんのためかね」と私は亦、言った。

「ぼくは君と話がしたい」(四十八頁)

ジャックに関する描写——「くるしげな声」、「静かなところがあるんだ」という勧めは「騒ぎのなか」で「たのしんでいた」「私」と対比されている。即ち、パーティで、醜い自分を誘う人がいないという状況に、神の力を信じるジャックが耐えられないのに対して、「私」はむしろそれを楽しむことができる。この対比によって、「私」は、自分の優越感を示そうとしているのではないか。ここに微妙に入り込んでいる優越感が、コンプレックスのコンプレックスたるゆえんである。

以上、主に父が「私」に与えた影響を検討した。だが、子供が成長する際には、母も当然重要な役割を果たしているはずである。では、「私」は母の影響をどのように受けたのだろうか。あるとすれば、それは手記にどのように表れているのか。

2 母の影響

「私」は子供の時から、清教徒である母にきびしい禁欲主義を押しつけられた。具体的には、女の子と遊ぶことができないことや、十歳を過ぎてから従妹とさえ二人きりであることも許されない。また、寝衣に着替える時下半身を見ること、寝る時手を毛布の下に入れることも禁止され、『灰かつぎ』や『アラビアンナイト』のような童話を読むことも許されなかった。遊ぶ時にもタブーがあり、寝る時にも規則があってリラックスできない。何もかもに制限がある。「私はなにもせず独りで、じっと生きていた」。この告白は幼年時代の「私」が教徒として育てられた時の孤独を表しているだけでなく、人間として生きている実感がないことも表出しているのだろう。

十二歳の時、ある日、「私」は家の窓際に

女中イボンヌが老犬を虐待する光景をみた。これは「私」にとって決定的な出来事であった。「私」は次のように語る。

私はふるえながら、一切をみていた。しかし、それは恐怖のためではない。可哀想な母が息子に強いた純潔主義の厚い城壁が、その日、音をたてて崩れたのである。私はその時味わったのは、情欲の悦びである。あの肺病やみの老犬の首を押しつけたイボンヌのむっちりした膝がしらは私の眼に焼けつくように白く、あまりに白くのこと。私の肉欲の目覚めは虐待の快楽を伴って、開花したのである。(四〇頁)

この事件について、「サディズムの快感を『私』はこのとき知ったのだ」¹⁵（武田友寿1971）、「もし、清教徒の母が〈私〉に〈きびしい禁欲主義を押しつけ〉なかったならば、イボンヌの老犬を虐待する光景も一小事件として忘れ去られ、サディズムも開花することはなかった」¹⁶（笠井秋生1987）等と指摘する論がある。確かに、この「他の少年たちならなんでもなく見過ごしてしまったこの出来ごとが」¹⁷「私」に「情欲の悦び」と「虐待の快楽」を感じさせたのは、母の禁欲主義と関係がある。また、「私」が「サディスト」になる別の要因にも着目した勝呂奏（2013）の論文がある。彼は「〈私〉はすでに少年期にサディストの悦びを知りはしていたが、」「はつきりサディストを自覚」したのは、「大戦の勃発による現実の変化によってである」¹⁷と述べた。しかし、手記の中で、語り手である「私」は自分が「サディズム」ではないと明確に反発した箇所がある。¹⁸これは「私」の主観的な理解であるのに、勝呂はこの部分について言及しない。それは、彼が手記で語られた「私」の行動を客観的事実として問題に

して、「サディズム」に当たるかどうかを考えていることを意味する。けれども、主観によって語られたことを事実として考えるより、語りに現れた「私」の認識の主観性を問題にすることが重要ではないか。従って、なぜ「私」はイボンヌが老犬を苛む場面で「情欲の悦び」と「虐待の快楽」を感じたのかについて、具体的に分析してみよう。

イボンヌが老犬を苛む場面を目撃した「私」が感じたのは「情欲の悦び」と「虐待の快楽」である。即ち、イボンヌの行為は「私」を引き寄せる要素を二つ持っている。一つは「情欲」であり、もう一つは「虐待」である。簡単に言えば「性」と「暴力」であろう。

「性」は十代の子供にとって極めて重要な問題である。人間の身体は十代で変化しはじめ、そこから男女の区別が生じる。いわゆる性の目覚めである。それによって、自分で自分を意識するという自己意識が確立し始める。人間にとって性の自己確認は自立の過程で大きな役割を果たす。「私」の場合、イボンヌの行為で「情欲の悦び」を感じたのは、体が性徴期に入り、もともと「性」に対して好奇心があるにもかかわらず、母の極端な禁欲主義の抑圧で禁忌されたもの（性）がかえって魅力を増し、これに対する好奇心が一つのオブセッションとなったのだろう。

また、イボンヌが苛んだあの老犬は、「私」が子供の時に「非常に懼れた」ものである。従って、イボンヌの行為から、恐怖の存在と向き合える「暴力」の魅力が「私」に感じさせたのだろう。コンプレックスのせいでも、人と接する時いつも「辛かった」「私」にとって「暴力」はこれを乗り越える羅針盤のようなものになった。

イボンヌ事件が「私」に「性」と「暴力」を喚起したのは決して偶然とは言えない。

「私」がキリスト教にとっての禁忌であるこれらを求めたのは、母の純潔主義への反逆と結びついてはいたはずだからである。しかし、「私」を徹底的に変えたのは次の事件である。

中学校を卒業する前、父は「私」を連れてアデンへ旅行した。アデンで「私」は「人間の本能や欲望を縛りつけている保守的なリヨンの重く苦ししい空気から」突然解放され、「もう母の監督もない、牧師の束縛もない」、自分は「自由であり、いかなる行為もなしうる」と感じた。アデンの迷路で、アラビヤ娘と少年が演じる曲芸があった。しかし、「私」は曲芸ではなく、少女が「容赦なく」少年の「頭の上で足ぶみ」をし、それに、黒い眼には「残忍な光に燃えた」のを見た。その時「私」は「倒れそうだった」。しかし、翌日に「私は父の不在を利用してもう一度、あの迷路まで」行って、少年を探し出し、彼に気を失わせるまで苛んだ。

この事件について、大平剛は次のように述べる。

この歪んだコミュニケーションの成立によって「私」は想像上の美しい自己と合致することができたのである。

ただ、ここで注意しておきたいことは、イボンヌによって知らされた世界観というものがこの社会では秘密にしなければならないものであって、そこで実現される自己は想像上のものでしかないということだ。だから、その行為を実行するのはアデンという遠く離れた場所においてだけだったのである。¹⁹

ここで、大平は二つのことを言っている。一つは、アデンの経験は、「私」がイボンヌの体験で手に入れた「想像上の美しい自己」像を、実践によって実現することであるこ

と。もう一つは、その実行は遠く離れた場所でしかできないこと。大平が言う「想像上の美しい自己」とは虐待するイボンヌの「白」い膝の美しさと同一化することである。この解釈に、必ずしも筆者は納得できるわけではない。それにもかかわらず、アデンの経験を「私」の自己完成とする解釈からは示唆を得ることができた。また、筆者は、少年を苛む行為を行う場所は「アデンという遠く離れた」ところでなくても、母の監視と離れ、「私」にキリスト教の雰囲気を感じさせない場所であればいいと思う。では、なぜ「私」は少年を苛む対象として選んだのか。それに、なぜ気を失うまで苛んだのかが問題である。この点を解明するために、次の一節に注目したい。

突然、娘はつれの少年を地面に寝かせた。彼の脚は徐々に彎曲してそりかえったまま、頭の上まで届いた。その姿態は交尾の刹那の蠍のようだった。裸体の娘は、少年の足と頭との上に飛び上がった。少年の体は、殆ど耐えきれぬ程、弓なりになった。(四十二頁)

ここで、娘が少年を苛む場面とイボンヌが老犬を苛む場面はほぼ同じ図式なのに、なぜ「私」に「情欲の悦び」と「虐待の快樂」をもたらさず、逆に「倒れそう」で、体が痺れ、どうしたらよいか分からない状態になったのか。そこで、この曲芸の形式について考えてみると、それはかなり特徴的であることに気がつく。まず、娘が主となり、少年は娘に従って行動すること、また、娘が少年を押さえつけて少年の身体の形をむりやりに作る。これは母と「私」の関係に非常に似ているのではないだろうか。即ち、「私」は母に従って行動したのであるし、母は「私」に

純潔なキリスト教徒としての教義を押しつけた。つまり、「私」はこの曲芸の少年の姿の中に母に苛まれる自分自身の姿を見たから、「倒れそう」になりながら、「ホテルまで夢中で走りかえった」のではないか。

また、成長にともなって、自我は自立を阻む力をおさえるようになる。「私」は少年を氣を失うまで苛む。これはある意味での「殺し」であり、自分と同じ位相にいる少年に「殺し」をなすことによって、今まで母の言いつけに従って生きてきた自分を殺したことを意味すると考えられる。

このように少年を「殺した」ことは、「私」が自ら教義を破り、母が信じているキリスト教の偽善性を証明しようとしたことを意味する。しかし、キリスト教が信用できないと思うなら、別に信じなくてもよいし、それから離脱すればよいだけである。なぜ「私」はあえて自分の生涯をかけて「悪そのもの」になり、キリスト教の偽善性の証明にここまで執着するのか。この謎を解くためには、「私」とジャックの闘いの過程を検討し、その内実を明らかにする必要がある。

第二章 「私」という「白い人」

1 ジャックとの闘い

本論の「はじめに」で、「私」の主観を離れてジャックとの対立を見ればどうかという問題を提出した。ここでは、まずこれについて考察してみる。手記によると、地理学教室でジャックは「私」に、「ほくは、基督のように、ほくの顔だけではなくこの世の顔を、みにくい顔を背負うつもりだ」と言った。つまり、彼は同じ醜い「私」を助けてやりたいと考えている。また、彼は一週間ごとに「私」の机に一冊の聖書を置いた。それはいつか「私」を感化することを期待したの

だろう。そして、ナチに加担した「私」がジャックを拷問した時、次のような対話をしたことがある。

「お前、俺がそんなに憎いか」

「憎くない」虫のような声で彼は答えた。

「憎まずに何故、抗独運動に参加したんだ」

「基督者は憎悪のため闘わない……正義の……」（七〇頁）

ジャックは小さな、暗い眼を私の方に向けた。それから「君こそほくを憎んでいたのだな」といった。

「うむ、俺はお前を憎んでいるよ。それをお前は、あの大学時代から知っていたらうが」

「なぜだ。なぜ、ほくが」と彼は喘いだ。「ほくが憎いんだ」（七〇頁）

ここでのジャックの言葉から見れば、彼は「私」を憎んでいないし、また大学時代から「私」に憎まれた原因も知らない。つまり、ジャックから見れば、「私」との関係は対立関係ではないのである。従って、手記に表されている対立関係は、「私」の側からの一方的な思い込みであるということになる。この結論を踏まえて、「私」が自分の頭の中でどのようにジャックを対立者として取り扱うに至ったのか、分析してみる。

第Ⅲ章では「私」のジャックに対する描写は、一言で言えば、「私」よりみにくい神学生である。しかし、第Ⅳ章の地理学教室の会話で、ジャックが「私」を救済したい意図を表した後、「私」のジャックに対するイメージは次のように変化した。

ジャックは柱に崩れるように靠れ、それ

に顔を押しつけたまま、動かない。その姿勢、その身振りは私に突然、基督を思いださせた。基督のように彼も亦、私の斜視の傷を背負い、ひきうけようとして酔っていった……。(五〇頁)

つまり、「私」の心で、ジャックはもうただの神学生ではなく、基督のような存在に変化した。そして、第V章のはじめで、「私」は「彼は攻撃してきた」と語る。先に明らかにしたように、ジャックとの対立は「私」の心の中にしか存在しないので、この語りから分かるのは、地理学教室で会話した後、「私」がジャックを自分の対立者の立場に置いたことである。つまり、ジャックを善を代表する基督と見なし、「私」は悪を代表することで、彼と戦おうとするのである。このようにして、「私」はジャックを打ち倒すチャンスを待ちうけたのであった。

ある日、「私」はジャックが机に置いてくれた『信仰の歓喜』という本の最後の頁の余白に彼が書いた読後感を見つけた。その内容は次のようである。

「基督がくるしまなかったと言うのか。基督はその生涯に二度の心理的苦痛を味わわされた」味わわされた奴は受身に表現していた。「ひとつは明日の迫害、拷問を予感したゲッセマネの園で、主が血のごとき汗をながし給うた瞬間である。今ひとつは、彼がユダに裏切られた時だ。ユダを基督が愛さなかったと誰が言えるか。」(五十一頁)

この読書筆記から分かるのは、ジャックが基督は自分を裏切った人さえ愛し続けると考えているということであろう。ユダはほぼ最後まで基督につき従う十二人の弟子の一人で

あり、基督にとって非常に親しく、極めて大切な人である。しかし、基督はまさに自分が一番信じている人に裏切られた。その時感じた苦しみ、悲しみは想像に難くないだろう。それにもかかわらず、彼はユダを憎んでいない。これが聖書の教える基督の愛だとジャックは考えるのだろうか。

それに気付いた「私」は「聖書を逆さまによむこと」によって、ジャックを苦しめることができると思いついた。つまり、ジャックを基督と同じ境地に置き、彼に聖書のいう基督の愛が実際には存在しないことを思い知らせるつもりなのであろう。具体的には、「私」はジャックにとってのユダ、即ち彼が愛するテレーズを誘惑し、彼女に彼を裏切らせることを計画する。

ところが、「私」はテレーズの誘惑に成功した後、歓びや達成感を感じない。むしろ逆に「私」が感じたのは、「なぜだかわからない。悲しみというよりは疲労に、非常に深い疲労にちがいがなかった。埋めるべき空間を埋めたあと、もはや、なにを為していいのかわからない」(五十六頁)と「私」は述べる。同じような感じは、二回目の攻撃でジャックを自殺まで追い詰めた後にも現れる。それは「かなしみというより、非常にふかい疲れに似ていた。埋めるべき空間に埋めたあと、もはや、なにをしてよいのか、私にはわからなかった」(七十六頁)のである。

なぜ「埋めるべき空間を埋めたあと」、「私」は疲労を感じ、何をしてもよいかかわからない状態に陥るのだろうか。ジャックを攻撃することは、彼が代表する善を埋葬するためではなく、それ以外の何かを求めることなのだろうか。

この問題を解くには、二回目の攻撃——松の実町でジャックを拷問する話にも触れなくてはならない。「私」は当時の心情について

手記に次のように記している。

拷問中ジャックは殆ど呻かなかつた。私は、最初キャバンヌが、次にアレクサンドルが撲りつけるのを見ながら、ジャックは恐らく耐えるだろうナと思った。彼の肉体に、くい込むかたい、鈍い響きを聞きながら、その肉体がどこまで耐えるかを待った。ふしぎに私は一方ではジャックが絶叫するのを待ちながら他方では、耐えろ、耐えろと念じていた。(六十八、六十九頁)

この部分について、玉置邦雄は「矛盾的心情をみせて揺れ動くかにみえて、『私』の内面の真実が照らし出されたと考えられる。隠された期待、サド的悪にまともりつされた自己救済への秘かなる願望がそこに現れたと考えるのである」²⁰と指摘する。確かに、「矛盾的心情」は、「私」の心にあるのは、ジャックと対立するものだけではないことを示す。しかしまたそれだけではなく、語り手はここで「ふしぎに」という言葉を使っている。つまり、「私」はその時、なぜ自分の心に「耐えろ」という声があるかがわからなかったのである。その「ふしぎ」な声とは、実は無意識のうちに存在する「私」の願望であろう。それが、ジャックの自殺に伴って意識上に浮かび上がってきたのである。従って、ジャックが自殺した直後の「私」の心理は次のように描かれている。

(お前は自殺によって俺から脱れたつもりなんだろう。同志を裏切るべき運命やマリー・テレーズの生死を左右する運命からも脱れたつもりだろ。ナチも俺も、もう、マリー・テレーズをお前のために使うことはできない。だが、それがなんだ。お前は俺を消すことはできない。俺は今だってこ

こに存在しているよ。俺がかりに悪そのものならば、お前の自殺にかかわらず、悪は存在しつづける。俺を破壊しない限り、お前の死は意味がない。意味がない)(七十七頁)

これは「私」が「勝利よりもむしろ敗北の方を望んでいた節」²¹だと秋山公男は主張する。また、「悪の世界に身を置きながらもその悪の滅びることを主人公は願っていたと解釈できないことはない」²²という笠井秋生の説もそれと同質である。筆者はこれらの見解に同意するが、同時にまた先の引用部分における「耐えろ、耐えろと念じ」る矛盾した気持ちのさらに奥には、「『私』に勝つところを見せてくれ」という強い要求があるのではないかと考えている。

多くの先行研究は、「私」は神に対しておむね「拒否しつつ、実は求める」という矛盾を抱えていると整理している。たとえば、笠井秋生は「神を拒否し、悪の世界に生きる『白い人』の〈私〉も、その心底で神を求めている」²³と述べる。また、陸根和は笠井の見解を踏まえながら、「『白い人』で注目すべきところは、神を拒否し、自分を無神論者であるといいながら、悪の世界に生きる主人公『私』も、その心底で神を求めているという点である。白い世界の彼の意識には、神の概念が厳然と根づいている」²⁴と考える。秋山公男は「神を拒絶しつつも一方でそれを希求せざるをえない『私』の深層心理」²⁵があると指摘するし、山田都与も「主人公がいずれ神を裏切る役割でありながら、「神を忘れ去ることのできない存在である」²⁶と述べている。

以上の諸家の説は、神を拒否しつつ同時に求める「私」の態度を「矛盾」と捉える点で共通している。しかし、筆者の考えでは、それは矛盾の関係ではない。むしろ、神を拒否

したかに見える「私」の行動は実はすべて神への求愛であり、神を求める倒錯表現であると考えられるからである。なぜかという、ジャックが自殺した直後、「私」は、「まるで、私がジャックをながいこと愛しつづけ、その愛に裏切られ、喪ったような気持だった」と手記で書いている。これについて、秋山公男は「ジャックの自殺に表象される『神』の死滅が『私』を打ちのめす」²⁷と論じた。しかし、「私がジャックをながいこと愛しつづけ、その愛に裏切られ、喪ったような気持だった」という言葉から見れば、「私」は神を否定していたどころか、むしろ神の愛とその存在を認めていたからこそ、こんな気持ちを感じたと考えられるのではないか。下野孝文は「ジャックに体现することを求めた『悪』を粉碎するような善の力、聖なるものの現前、一種の〈顕現 (Manifestation)〉のようなものに対峙できなかつたことに因るのではないか」²⁸と分析する。つまり、下野は「私」が実は善の存在、神の顕現を求めていたことを見抜く一方、ジャックが「私」の期待を裏切ったと考える。この考えに従えば、ジャックの死に直面した時、「私」は今までジャックを苦しめ、拷問し、彼に反抗したすべての自分の行動が、実は神を愛していたからこそのものであったと初めて気付いたのだろう。かつての「私」は現実のどこにも神の愛が感じられないから、神に反抗するという極端な方法で彼の愛を求めたのであり、それは母親の愛を求めて反抗し、暴力を振るう子供、あるいは「別れよう」と言うことによって相手の愛を確かめようとする恋人のような深層心理であろう。このような表現は、自分の深い願いを逆の形で示したものとして「倒錯表現」と呼ぶことができるだろうが、これを「矛盾」と呼ぶことは適当でないと思われる。

しかし、当時の「私」の主観的認識を超え

て、ジャックの自殺が本当に神の顕現と無縁だといえるのだろうか。手記を書いている今の「私」は、ジャックの自殺を経験した後、何か変わったところがないのだろうか。

玉置邦雄は、「ジャックへの秘かな望みを抱いた『私』自身が、いかに原体験の世界から立ち上がり、ジャックの挫折をのり越え、自己の生を展開していくだろう」かを、「機会を改めて綿密に論究したい」²⁹と言っているが、遂に彼はその問題に踏み込まないままである。だが、実はこの問題こそが非常に大切であって、これを明らかにしない限り、「私」の全体像を立ち上げることはできない。

2 拷問者として生き続ける「私」

神に対する愛に気付いた「私」は、その後いかに生きていくのか。小説の最後で「私」はジャックの死までに至る自分の過去を書き終わって現実に戻り、目の前の世界を次のように描く。

闇のなかでリヨンは燃えていた。ベルクール広場もペラッシュ駅も、レピュブリック街も、あのイボンヌが老犬を白い腿でくみ敷いたクロワ・ルツの坂路も真赤に燃え上がり、その火はこの街の夜空を無限に焦がしていた（七十七頁）

この場面について、笠井秋生は「彼は自分の罪の浄化をひそかに願ったのである」³⁰と解説したが、筆者は異なる見解をもっている。闇のなかで燃えていたベルクール広場、ペラッシュ駅、レピュブリック街、クロワ・ルツの坂路はすべて過去のシーンにあらわれた場所である。そこでは「私」はイボンヌが老犬を苛む場面を見て、テレーズを誘惑し、ジャックを苦しめ、さらにナチにも加担した。今、あの世界は、火によって燃えつづ

けている。それはつまり、過去の「私」が過去の世界とともに、焼失することを意味するのではないか。では、過去の自分を死なせた「私」は、どんな形で再生を迎えるつもりなのか。

その答えは、「私」がこの手記を書く目的の中に示されている。

私は生きねばならぬ。第一、歴史が、この私を、いや私の裡の拷問者を地上から消すことは絶対にできないのだ。その事実を私はこの記録にしたためたいのである。(四十一頁)

つまり、「私」は拷問者として生きつづけようとしているのである。『拷問者』とはこのとき純白の世界に疎外された『他者』であり、『肉体』であり、理想を語るものに冷笑を浴びせかける者の名となるのである。同時にそれは白い世界、すなわち均質の普遍的社会の成立を目指す理想とともに生まれ、その理想のために嘆き悲しむもの名前でもある³¹と指摘した論者がいる。しかし、その指摘の内容は過去の「私」に対する総括ではない。このような見解を出したのは、恐らく論者にジャックの死を経験した「私」の変化が見えなかったからであるか、あるいは変化が起こらなかったと考えているからだろう。

かつて、「私」が神学生であるジャックを基督の身代わりとして拷問したのは、それによって善の不在、神の不在を証明することを目指したからである。しかし、思いがけないジャックの死に直面した時、「私」は今まで自分がずっと神を愛してきたことに気付いた。従って、語り手である今の「私」がいう「拷問者」は、決して以前の神の存在を消すための拷問者ではなく、神を愛する「拷問者」であろう。

しかし、神を愛するのに、なぜジャックのような信仰者になるのではなく、あえて「拷問者」という立場に拘らなければならないのであろうか。この問題に答えるには、「私」の変化を引き起こしたジャックの死の意味を明らかにする必要がある。ジャックが自殺した直後、「私」は「意味がない。意味がない」とずっと呟いた。しかし、本当に「意味がない」のか。次の章ではジャックの自殺をめぐる、この問題の行方を探ってみたい。

第三章 ジャックの自殺の意味

最初に「私」がジャックを拷問した時、それはジャックに同志を裏切らせるためであった。しかし、いかに拷問してもジャックは口を割らなかった。そこで、「私」はテレーズを連れて来て、ジャックを、同志を裏切るか、テレーズを裏切るかという選択の前に立たせた。この選択は、「私」から見れば、ジャックがどちらを選んでも人間は悪だという証明になるほかはなく、それは「私」の勝利を意味する。武田友寿も『「私」の論理に完璧性を欠けていたとは思えない。むしろその整然たる論理には一点の過誤もなかった³²と指摘する。ところが、ジャックは思いがけない選択——自殺を選ぶ。ジャックが自殺したことを知った時、「私」は、どうしても納得できない気持ちになる。「そうか、舌をかんたのか、ほんとうに私はそれを予想していなかったんだ。自殺はカトリック教徒には、絶対に行ってはならぬ大罪であったからである。(お前、神学生じゃないか、それなのに お前は、この永遠の刑罰をうける自殺を選んだのだ)」(七十六頁)。

しかし、なぜ「私」は、自殺という選択を全く予期できなかったのか。それは「私」が、キリスト教徒は絶対自殺してはいけない

という教義を疑うことが全くできなかったからである。そう考える「私」は、「聖職者の〈ジャック〉より」深い「キリスト教的な感覚」と「キリスト教的な考え方」³³を持つ人間であるという指摘がある。はたしてそうだろうか。また逆に言えば、教義に反して自殺を選んだジャックは、本当のキリスト教徒でないと言えるのだろうか。

当時の状況から見れば、「私」はジャックの口を割らせるため、テレーズを利用し、二つの選択肢を用意した。即ち、①テレーズを救うために同志を裏切るか、それとも②同志を守るためにテレーズを犠牲にするか、である。しかし、これはジャックにとって、どちらも選べられない選択である。このような極限状況において、実際ジャックに迫られた選択は①同志あるいはテレーズいずれかを犠牲にするか、それとも②他人を救うため、自分を犠牲する、つまり自殺するかである。しかし、自殺はキリスト教の教義が許さないのであるから、ジャックは教徒として教義を守らなければならないはずである。それに、子供の時からキリスト教に入り、今まですべて教義に従って生きてきたジャックにとっては、自殺を選ぶことは教義を破るだけでなく、今までの価値根源であるはずの教義を放棄し、それまでの自分を裏切り、自らの全てを棄てるに等しいことであるだろう。ジャックはここで人生最大のピンチに出会ったと言えるが、そこでジャックはキリスト教の教義を破り、自殺を選んだのである。これは果たして基督を裏切る選択なのだろうか。ジャックの自殺は「カトリック的信仰論理そのものの破綻とよぶほかはない」³⁴と菊田義孝は言うが、確かにそれは「教義としての宗教」の破綻だろう。だが、他人を救うため、自分の精神と肉体のすべてを捨てることは、むしろ身を持って基督の存在を証明することであり、

これこそ基督が教える「愛」であると言えないか。むしろジャックは教義を破ることによって、十四歳の時から願っていた、基督のような存在となる願望を実現した。彼は教義を破ることで、教義を超えたともいえるのである。

教義は何が善で何が悪か、何をすればよく何をしてはいけないかを規定する。しかし、真の信仰とは教義を受動的に守ることではない。むしろ、何が神の愛であり、善であるのかを、能動的な姿勢で問い続けることこそが求められているであろう。ジャックの自殺は、教義に受動的に縛られるのではなく、身をもって神の愛を追求したものといえる。その意味で、ジャックの選択は信仰のあるべき姿勢を示すものであり、非常に積極的な意味をもつと言わなければならない。

しかし、そのことはジャックの死に直面した時の「私」には理解できなかった。だからこそ「意味がない。意味がない」とずっと呟いたのである。そのことは、「私」が「キリスト教的な感覚」「キリスト教的な考え方」を持つ人間というより、単にキリスト教の教義に縛られる人間だったということを示す。無神教と宣言した「私」が実は誰よりも教義にこだわっていたのである。「私」は今までキリスト教の教義で世界を認識してきたのであるから、ジャックの死によって開示された教義を越えた世界が「私」に理解できるはずがなかった。これは、当時の「私」の理解を超えた世界であった。

しかし、以上のような教義にこだわる「私」は、語り手である「私」が過去の出来事を描くことによって浮き彫りにされたのである。つまり、ジャックが自殺した直後に、「私」はその意味を理解できなかったにもかかわらず、手記を語り始めた「私」は、ジャックが教義を破る行為から、過去の自分

が教義に縛られていたことを意識し始めていたのではないだろうか。そうであるからこそ、「私」はこの手記を、母が自分に教義に押し付けた幼年時代から語り始めたのではないだろうか。

また、ジャックの自殺（自己犠牲）は、単なる観念としての「善」ではなく、むしろこれこそ倫理の根源から発する「善」の輝きを示すものであろう。そして、それはほかならぬ「私」の拷問によって引き出されたのであった。つまり、ジャックの死を経験し、自分が本当は善の存在、神の顕現を求めていることを自覚した語り手（今の「私」）は、むしろ「悪」と「善」の徹底した対立のなかから、初めて観念を超えた倫理が発動することに気付いたのではないだろうか。あえてジャックの道を選ばず、自分自身は「拷問者」として生きようとするのは、拷問という極端な方法で神と善を問い求める姿勢であり、その中でこそ真の信仰の能動性を追求しようとするのではないか。

終わりに

遠藤文学の出発点といえる『白い人』のジャックは、教義を超えた世界のドアを開けた後死ぬことで、すぐ読者の我々を捨て去る。しかし、十一年後、遠藤周作は『沈黙』（一九六六年）で、教徒を救うため踏み絵を踏んだ神父ロドリゴを描いた。『白い人』のジャックと同様、ロドリゴも他人を救うため、今まで信じてきた教義を破った。違うのは、ロドリゴが踏み絵を踏む時、「踏むがいい」³⁵という神の声が聞こえたことである。これは、教義を破る行為に対する神の許しであるだけではない。「私はお前たちのその痛みと苦しみをわかちあう。そのために私はいるのだから」³⁶というのは、人間を裁く神ではなく、人間と苦痛を分かち合う神である。言い換えれば、ロドリゴに聞こえたのは、教義を超えた世界からの神の呼びかけであろう。それゆえにこそ、彼は教義を破った後も生きつづける根拠を得たのではないか。

* 本稿に引用した本文はすべて『白い人』『遠藤周作文学全集』第六巻（新潮社、一九九九年）による。論中に本文を独立した段落として引用した場合、すべて引用頁を明記する。なお、論中に「」つきで引用した本文にすべて頁数を付すのはあまりに煩瑣にわたるため、必要と判断した場合をのぞき、原則として省略した。

〈注〉

- ¹ 遠藤周作「合わない洋服——何のために小説を書くか」（『遠藤周作文学論集・宗教篇』、講談社、二〇〇九年十一月、p.304）
- ² 遠藤周作「私の文学——自分の場合」（『遠藤周作文学論集・宗教篇』、講談社、二〇〇九年十一月、p.249）
- ³ 武田友寿『『白い人』の背景』（『遠藤周作の世界』、講談社、一九七一年七月、p.104）
- ⁴ 玉置邦雄『『白い人』の研究』（『人文論究』25(1)、関西学院大学、一九七五年六月、p.87）
- ⁵ 笠井秋生『『白い人』——人間を超えた存在と相

剋の劇』（『遠藤周作論』、双文出版社、一九八七年、p.85）

- ⁶ 秋山公男『『白い人』——サディズムと性』（『愛知大学文学論叢』132、愛知大学文学会、二〇〇五年七月、p.31）
- ⁷ 下野孝文『『白い人』論——その背景と現実感』（『作品論・遠藤周作』、双文出版社、二〇〇〇年、p.38）
- ⁸ 首藤基澄「遠藤周作の小説の構図」（『国文学解釈と鑑賞』40、至文堂、一九七五年六月、p.91）
- ⁹ 管原とよ子「遠藤周作『白い人』論」（『国語国文学研究』37、熊本大学、二〇〇二年二月二十三日、p.174）
- ¹⁰ 大平剛『『白い人』論』（『帯広大谷短期大学紀要』38、帯広大谷短期大学、二〇〇〇年十月、p.58）
- ¹¹ 山田都与「遠藤周作『白い人』の変容」（『金城学院大学大学院文学研究科論集』11、金城学院大学大学院文学研究科、二〇〇五年三月、p.129）
- ¹² 大平剛『『白い人』論』（『帯広大谷短期大学紀要』38、帯広大谷短期大学、二〇〇〇年十月、p.61）

- ¹³ 秋山公男「『白い人』——サディズムと性」(『愛知大学文学論叢』132、愛知大学文学会、二〇〇五年七月、p.14)
- ¹⁴ 河合隼雄『コンプレックス』(岩波新書、一九九五年九月五日第四十三版、p.60)
- ¹⁵ 武田友寿「『白い人』の背景」(『遠藤周作の世界』、講談社、一九七一年七月、p.98)
- ¹⁶ 笠井秋生「『白い人』——人間を超えた存在と相剋の劇」(『遠藤周作論』、双文出版社、一九八七年、p.76)
- ¹⁷ 勝呂奏「遠藤周作『白い人』論—初出稿から読む」(『人文研究』4、桜美林大学、二〇一三年三月、p.168)
- ¹⁸ 「断っておきたいが、私の場合、サディズムはこれら都合のよい精神分析学の理屈通りにはいかなかったのだ。私はたんに女性にむかってのみ、自分の加虐本能を感じたのではない。女性のみならず、すべての人間、大袈裟にいうならばすべての人類を苛みたいという欲望を私は後年、感じだしたのである。」(『白い人』『遠藤周作文学全集』第六卷、新潮社、一九九九年、p.41)
- ¹⁹ 大平剛「『白い人』論」(『帯広大谷短期大学紀要』38、帯広大谷短期大学、二〇〇〇年十月、p.63)
- ²⁰ 玉置邦雄「『白い人』の研究」(『人文論究』25(1)、関西学院大学、一九七五年六月、p.91)
- ²¹ 秋山公男「『白い人』——サディズムと性」(『愛知大学文学論叢』132、愛知大学文学会、二〇〇五年七月、p.27)
- ²² 笠井秋生「『白い人』——人間を超えた存在と相剋の劇」(『遠藤周作論』、双文出版社、一九八七年、p.82)
- ²³ 笠井秋生「『白い人』——人間を超えた存在と相剋の劇」(『遠藤周作論』、双文出版社、一九八七年、p.78)
- ²⁴ 陸根和「遠藤周作におけるイエス像序説——『白い人』『黄色い人』『海と毒薬』を中心に」(実践国文学(40)、一九九一年九月、p.101)
- ²⁵ 秋山公男「『白い人』——サディズムと性」(『愛知大学文学論叢』132、愛知大学文学会、二〇〇五年七月、p.26)
- ²⁶ 山田都与「遠藤周作『白い人』の変容」(『金城学院大学大学院文学研究科論集』11、金城学院大学大学院文学研究科、二〇〇五年三月、p.132)
- ²⁷ 秋山公男「『白い人』——サディズムと性」(『愛知大学文学論叢』132、愛知大学文学会、二〇〇五年七月、p.27)
- ²⁸ 下野孝文「『白い人』論——その背景と現実感」(『作品論 遠藤周作』、双文出版社、二〇〇〇年、p.38)
- ²⁹ 玉置邦雄「『白い人』の研究」(『人文論究』25(1)、関西学院大学、一九七五年六月、p.93)
- ³⁰ 笠井秋生「『白い人』——人間を超えた存在と相剋の劇」(『遠藤周作論』、双文出版社、一九八七年、p.85)
- ³¹ 大平剛「『白い人』論」(『帯広大谷短期大学紀要』38、帯広大谷短期大学、二〇〇〇年十月、p.67)
- ³² 武田友寿「『白い人』の背景」(『遠藤周作の世界』、講談社、一九七一年七月、p.109)
- ³³ 笠井秋生「『白い人』——人間を超えた存在と相剋の劇」(『遠藤周作論』、双文出版社、一九八七年、p.82)
- ³⁴ 菊田義孝「白い人」(『遠藤周作論』、永田書房、一九八七年十月、p.74)
- ³⁵ 「沈黙」『遠藤周作文学全集』第二卷(新潮社、一九九九年、p.325)
- ³⁶ 「沈黙」『遠藤周作文学全集』第二卷(新潮社、一九九九年、p.325)